

詩人の誕生

谷内柊太

歌が聴こえる。優しい歌だ。私は海の深くにいて、その声の温もりに依存しようとしている。これは恋だろうか？ もっと深いものだった気がする。それでも僕は一向に見えてこない歌い手の頬を撫でようと、両腕を力強く伸ばしていた。あと少し。あと少しで水面を破って、心地いい空気の世界に突き抜けられる。その時、一発の銃声と共に、あたり一面の海水が赤く染まった。

はと目が覚めた僕にはここがどこで、今がいつなのか皆目見当がつかなかった。携帯を確認する2047年5月、そこまで視界に入って、やっと僕は夢の濡れた幕を振り払うことができた。もう朝か、支度して大学に行かないと。外では忙しない東京の街が既に目を覚ましており、電車の振動がかすかに伝わってきた。白米と目玉焼き、味噌汁を用意して、携帯でニュースを見る。

「不適切言語運用取締法違反者、昨日は5人。」

もう見慣れた、なんてことないニュースの一つにそんなものがある。これは2027年、僕が生まれた年、に施行された法律で、我が国での『詩的』言語運用を禁止するものであった。反対の声もあったらしいが、言論の自由の部分的規制は本当は誰一人殺すこともできないし、すっかり視聴者が分散したオールド・メディアや、老衰してゆく読者を奪い合う書籍には政府の意向をどうにかする力はなかった。むしろ、コスパやタイパの名の下に効率を愛する現代人は詩という無駄の権化のようなものを退けることに若干の熱狂すらあった。不適切言語運用取締法に違反すると、違反者専用の刑務所で25年間を過ごすことになる。海外でも、この詩の廃絶は起こっていた。主な原因は2025年高明な大学の研究所の発表で、詩的言語運用が社会における発達障害や境界知能の増加に大きな影響を与えているということが明らかに

なったのだ。発達障害や境界知能、特に ADHD なんと言葉は近年広く認識されるようになり、また、人々の大きな恐怖の対象でもあったのだ。

日本の平凡な日々に変化は殆どない。音楽から歌詞がなくなり、本屋は自己啓発本やビジネス本で埋め尽くされるようになった。広告やポスターに記号が増え、文字が減った。大学の授業から難解なものが一つ減った。サラリーマンは働くし、ニートは引きこもるし、政治家は偉そうな顔をしているし、メディアは大衆を煽動しようとする。友達は笑っているし、知り合いの知り合いは気まずそうにする。大学の先生は過剰に上から目線な人もいれば、優しい人もいる。日常は何一つ変わっていない。

大学に行くと、いつものように友達と会ったり、サークルの部室に寄りして、授業を受ける。今日も平凡な木曜日だ。僕は用事があって図書館に行くと、不思議なことに気付いた。この図書館には確か地下なんてないはずなのに、そこには地下への階段があったのだ。僕は自分が夢でも見ているんだろうと思い、その階段を降った。するとそこには一冊の本もない世界があった。こんなのはますます不思議だと思う自分と、どうせ夢なのだからという自分が混在していた。全くの混乱の中、戸惑って後退りすると、ドンっと何かにぶつかる。

「しっかりせんか、若いの。」

そこには長い長い白髭を蓄えた仙人みたいな外国人の老人がいた。

「ここは……どこ？」

「ここは裏図書館だよ。気まぐれに『詩人』を迷い込ませては、からかっているんだ。これでもわし、詩が好きな人間の間では有名なんじゃが。」

「いや、僕、『詩人』なんかじゃありません！ 詩に興味ありません！」

「おや、とんだ詩嫌いがこの図書館に選ばれたみたいじゃな。」

「おじいさん、詩なんて……怖くないんですか？ 日本じゃ逮捕されるんですよ！」

するとおじいさんはひどく驚き、そして悲しそうな反応を示した。

「そうかそうか、わしは昔、詩を愛した者じゃ。君にわしらが育てた草の種

を渡そうじゃないか。いらなと思うたら捨ててもらって構わんよ。」

「草の、種？」

「そうじゃ。」

「わ、分かりました。」

すると、老人は重い咳払いをすると、一つの長い何かを聞かせてくれた。それは何か、沢山の矛盾を抱えていて、ボロボロの布みたいにみすばらしくて、しかし音楽的で、さも意味があるように聞こえる。「僕」そのものを探しているようで、でもどうしようもなく外世界からの救いのように「あなた」を求めている。聴かれることを強く切望していて、でも易々と触れてほしくないように。全てをあらわにしているのに、ありとあらゆるところに何かが生きていて、そして好かれるとか、嫌われるとかを全く気にしていないようだった。ただ、深く深くまで降りてきて、抱きしめて欲しいだけなんだろうか？ 世界征服でも目論んでいるんだろうか？

老人が最後の一節を終えた時、何故か胸が温かくなった。

「わしはな、これは詩だと信じておる。」

老人は言う。

「君も探してみるといい、ふと何かを言葉にしてみたいと思える瞬間を。」

老人の名前も聞き忘れたまま、来た道に戻るともうそろそろ次の講義の間だった。僕は急いで教室に駆け込む。不思議な気持ちだった、ドアが閉まること、ペンが落ちそうになること、知らない人が寝ていること、ありとあらゆる「こと」に何か別の言語表現がないのか、考えてしまった。教授の念仏のような講義にリズムとメロディーをかすかに感じてしまった。また、そのことすらも何か別の表現方法を考えてしまった。それは帰り道になると、とうとう頭の中を独占しだした。木が揺れること、ゴミが落ちていること、それを見ても見ぬふりして人が通り過ぎること、この視界の中にその三者が共存していること。電車が定刻通りに来ること、沢山の人が乗っているのに誰も話しかけないこと、とにかくこの世界には「くぐりであること」をそれ以外の表現で表すことができるのではないか、と考えてしまった。そしてつ

いに僕は家の近くの自動販売機にフェンスが反射していることに「し」と言
ってしまった。今日は平凡な木曜日なのでしょいか？